

口永良部島の火山活動解説資料（平成 22 年 1 月）

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

^{しんだけ}新岳火口直下を震源とする火山性地震が一時的にやや増加しました。

その他の火山活動に特段の変化はなく、新岳火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められませんが、火口内では引き続き噴気がみられており、火山灰等の噴出する可能性があります。また、火口付近では火山ガスに対する注意が必要です。

平成 21 年 10 月 30 日に噴火予報（噴火警戒レベル 1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 1 月の活動概況

・地震や微動の発生状況（図 2、図 3）

^{しんだけ}新岳火口直下を震源とする火山性地震が一時的にやや増加しました。火山性地震の月回数は 235 回（2009 年 12 月：93 回）で、前月と比べて増加しました。震源は新岳火口直下のごく浅いところに分布し、これまでと比べて変化はありませんでした。

火山性微動は少ない状態で経過しました。月回数は 16 回（2009 年 12 月：13 回）でした。

・噴煙など表面現象の状況（図 3、図 5）

白色の噴煙が時々観測される程度で、噴煙活動は低調に推移しました。最高高度は火口縁上 200 m でした。

26 日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、新岳火口及びその周辺の状況に特段の変化はなく、新岳火口から白色の噴煙が上がっているのが確認されました。

・地殻変動の状況（図 3、図 4）

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 22 年 2 月分）は平成 22 年 3 月 9 日に発表する予定です。

※この資料は気象庁のほか、海上保安庁、国土地理院、京都大学及び独立行政法人産業技術総合研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 20 業使、第 385 号）。

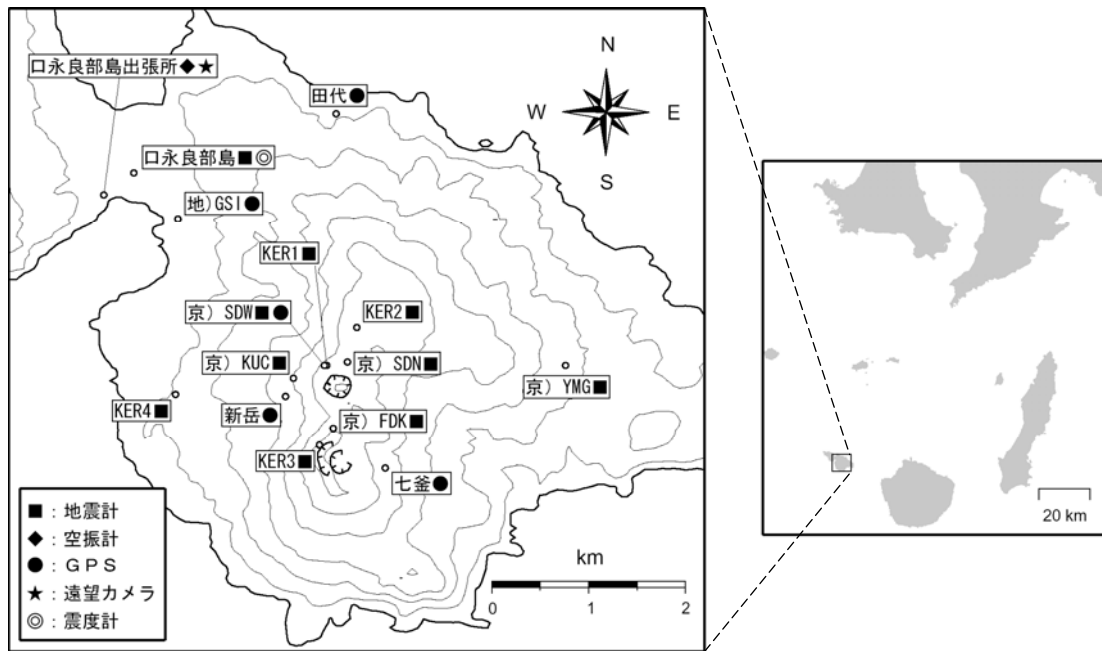
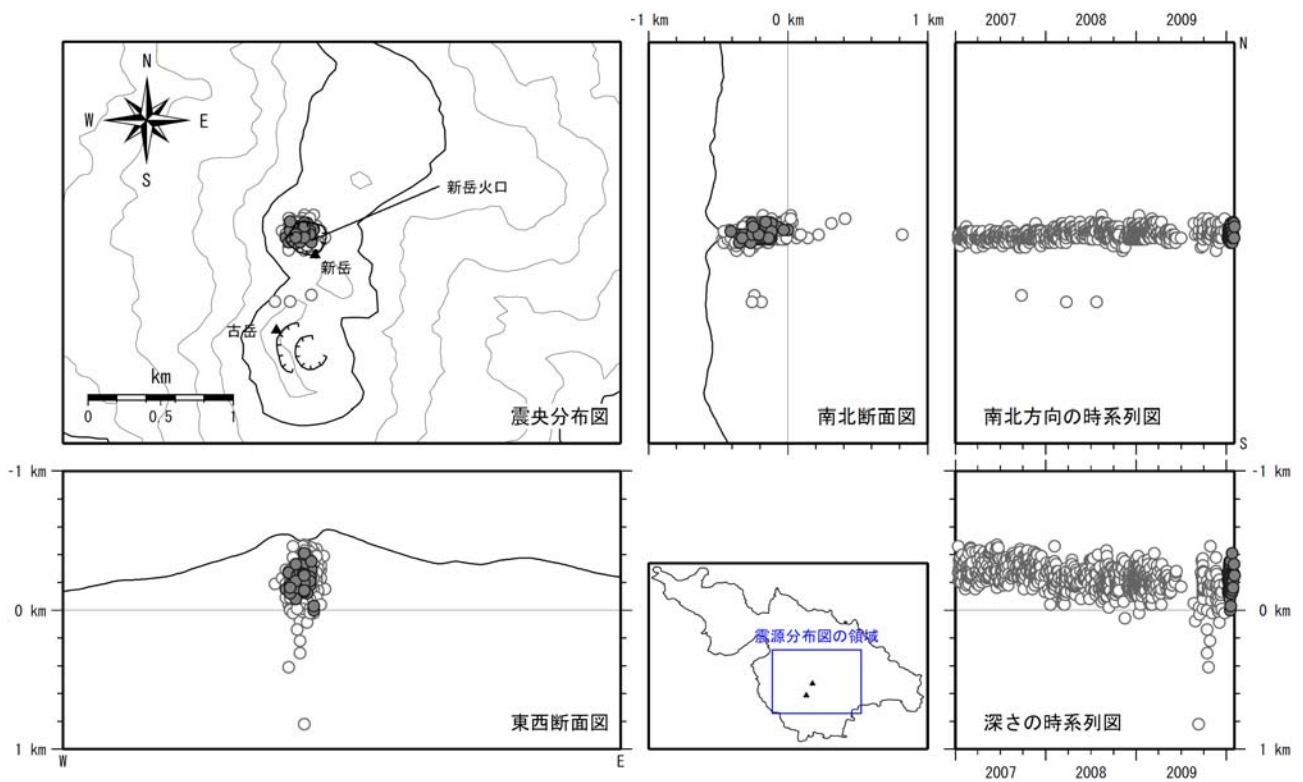


図 1 口永良部島 観測点配置図



- : 2010 年 1 月の震源
- : 2007 年 1 月～2009 年 12 月の震源

図 2※ 口永良部島 震源分布図（2007 年 1 月～2010 年 1 月）
 < 1 月の状況 >

火山性地震の震源はこれまでと同様、新岳火口直下のごく浅いところに分布しました。

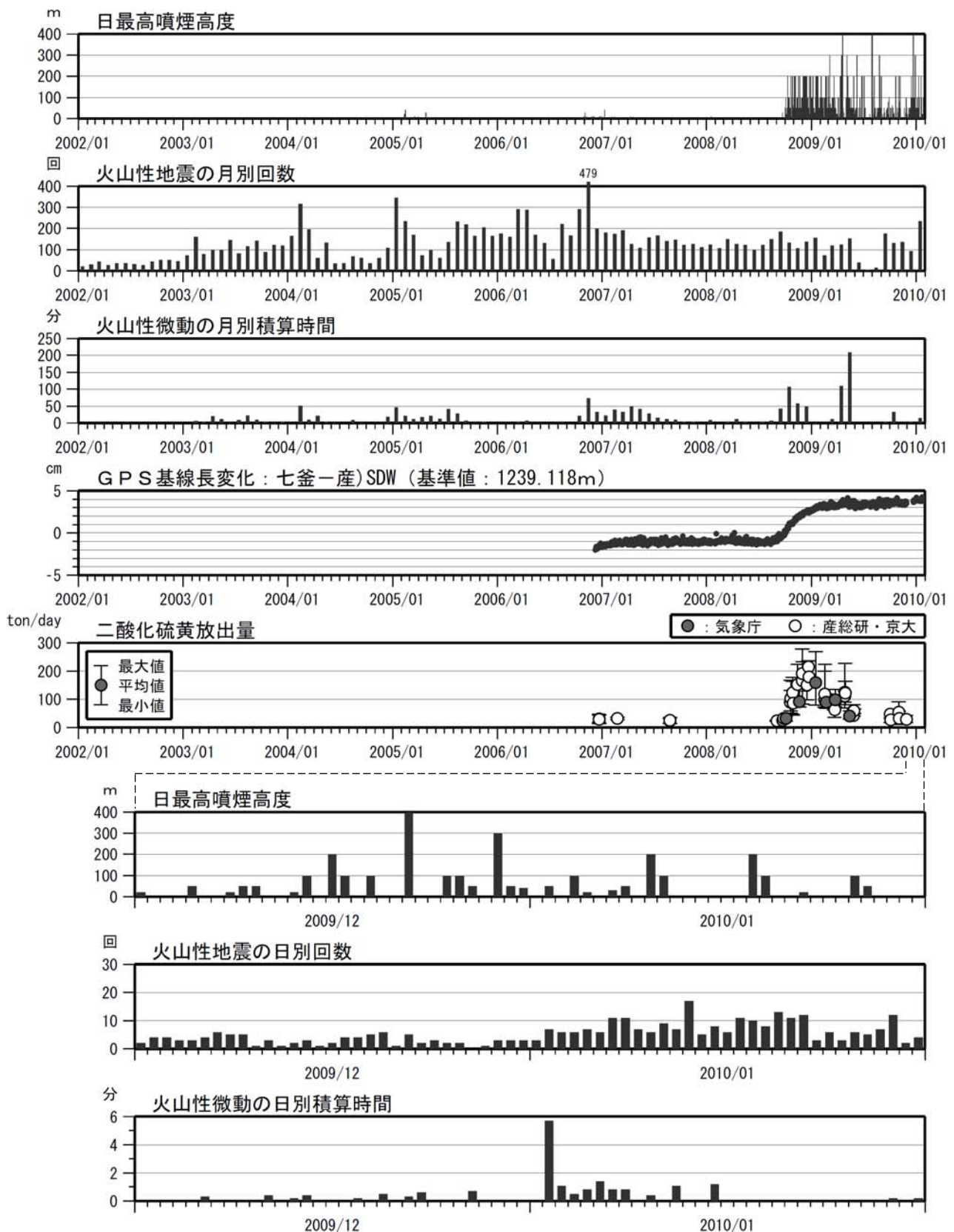


図 3※ 口永良部島 火山活動経過図（2002 年 1 月～2010 年 1 月）

< 1 月の状況 >

- ・新岳火口直下を震源とする火山性地震が一時的にやや増加しました。月回数は 235 回（2009 年 12 月：93 回）でした。
- ・火山性微動は少ない状態で経過し、月回数は 16 回（2009 年 12 月：13 回）でした。
- ・白色の噴煙が時々観測される程度で、噴煙活動は低調に推移しました。最高高度は火口縁上 200 m でした。

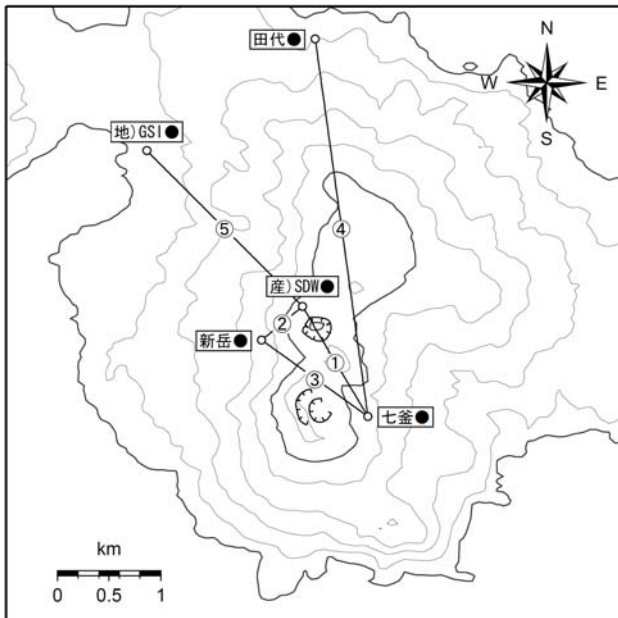
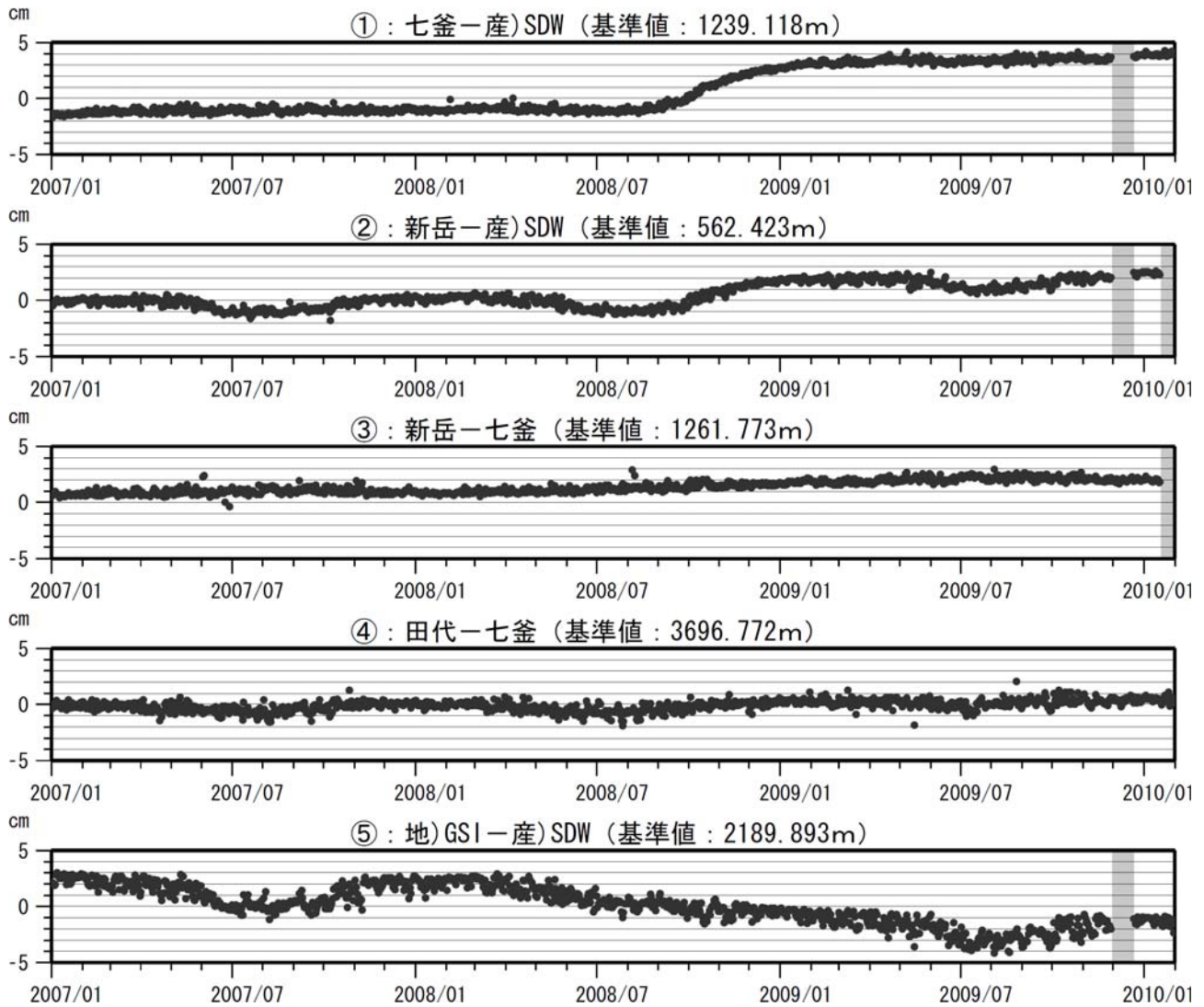


図 4※ 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化 (2007 年 1 月～2010 年 1 月)
 < 1 月の状況 >
 火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

灰色部分は観測点障害のため欠測。

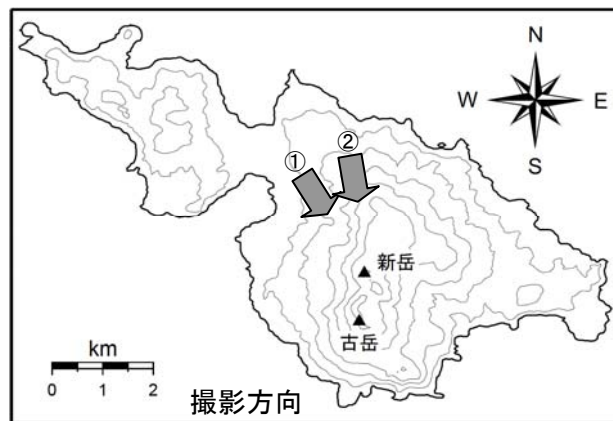
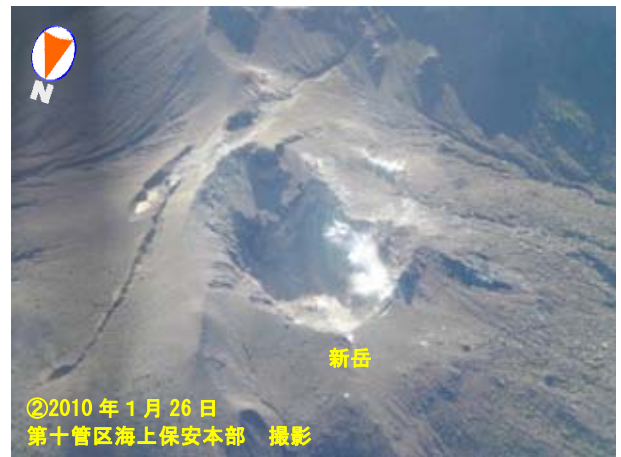
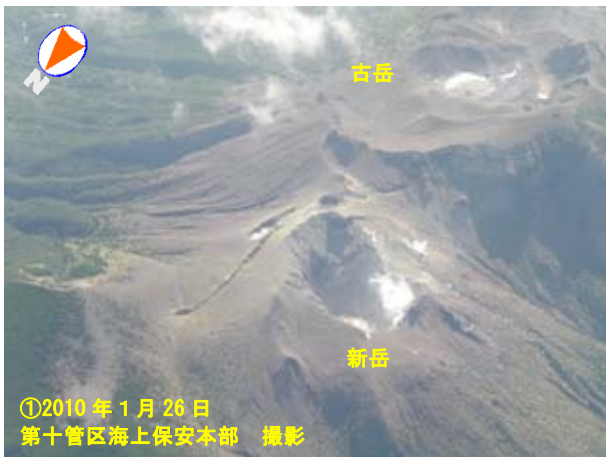


図5※ 口永良部島 新岳周辺の状況

26日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、新岳火口及びその周辺の状況に特段の変化はなく、新岳火口から白色の噴煙が上がっているのが確認されました。